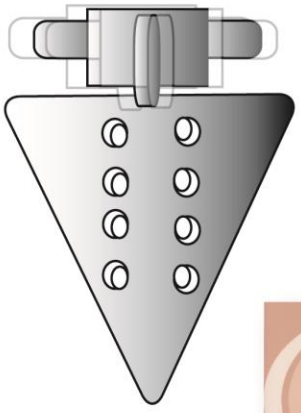
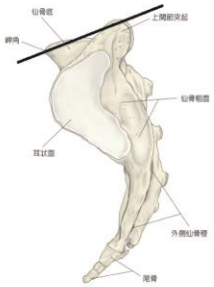
律動法ガイド





なぜ律動法は手技治療の頂点を行くのか？
律動法は新鍼灸法と並び、古代中国の神医・扁鵲の透視治療を再現している。
大部分の疾患が根源的に治せない西洋医学でさえ、MRI.CTの画像透視診断がある。
西洋医学を凌ぐ医療としての手技治療は身体感覚的透視診断が要求される。

腰椎5番の律動調整は、体内の全器官を瞬時に調整する。
それは人体全身組織を支配する気まで調整しているからである。

セミナー内容は、動画で「律動法」「手技療法」で閲覧を！

一般社団法人・律動法協会

律動法研究会　　ホームページ　www.ritsudou.com

手技療法はあらゆる治療法の原点である。器具を使用せず、最も人体の自然治癒力に近い治療法である。治療家の能力を最大限縦横に行使できるものであり、ゆえに治療法の初歩から、名人芸、神技といわれる最高点まで到達できる偉大な医術である。その頂点に立つ手技治療を受療できることは、多くの患者の希望であり同時にその実現は治療家の責務でもある。患者のための最高の手技治療を追求すること！律動法研究会の指導目標は、古代中国の扁鵲の透視診断治療の再現であり、大衆を救う平成の神医・扁鵲の輩出である。

律動法は唯一正確な正常・異常判定法…筋肉反射テスト・TR テストを指導する

あなたは街の手技治療の先生に終わりますか？　全国の病者に信頼される名人治療家になりますか？　治療家としての責任感いかんである

手技治療の名人への道

一.治療家はまず治療を知ること！疾患、病気とは何か。正常とは何か。なぜ治療法で治るのか？西洋医学も東洋医学もそして手技治療も、治療を知らずに治療法を学ぶ。

二.自分のための治療をしないこと！すべては多くの病者の苦しみを思い、患者のための治療に邁進すること。

三.西洋医学は多種疾患にわたり治すことに限界がある。治すことができる手技治療の価値を手技治療家は最大に発揮する社会的義務がある。

三.飛躍的臨床向上の秘訣　⇒頂点の治療法をあらゆる機会を通じて自己の目で発見すること。従来、治療学習は評判、権威に依存した選択をし、それで治療家人生を全うする。律動法の知識があり、真摯に取り組む治療家なら、筆者はすべての人に律動法の臨床を公開している。律動法は全国の病者救済のため、50 人の透視診断を体得する名人臨床家を養成し、輩出する。　　見学は問い合わせください

このガイドの内容

はじめに
手技治療の学び方
手技療法の展望

一部　律動法理論
1. 最高レベルの手技治療を追求して（カイロプラクティック、オステオパシーを超す）
創案から今日までの発展経緯
2. 律動法の治療理論
①脊椎全体と骨盤・頭蓋骨の律動現象　②腰椎５番（Ｌ５）の律動現象
③内臓呼吸、脳呼吸と律動現象④腰椎５番の律動調整と全身骨格系、内臓系、脳の調整
3. 治療法のすべては診断法にかかる
筋肉反射テストは高度治療を可能にする。
4. 診断できた地点まで調整できる

5. 現在存在する唯一最高の正常・異常判定法は筋肉反射テストである
6. ＴＲテストによる高度診断法
7. 体内透視診断活用のＴＲテストによる高度診断法
8. 腰椎５番の律動調整法、律動変位ＰＲ・ＰＬ

二部　律動法の診断から治療までの手順

1. Ｌ５の律動リスティングと調整法
2. 診断から治療までの手順
3. 律動法の臨床現場から
4. 律動法が発見する人体論・病因論は進化中

はじめに

手技治療の学び方

なぜ修得できる人、できない人に分かれるのだろうか。これから治療の学習をする以上、自分自身が修得できる条件に該当する必要がある。最初に重要な心構えについて考えてみたい。

従来多くの手技治療学習者が社会に巣立っていったが、振り返るとそのなかで熟達治療家として世に信頼される治療家は極めて一部の存在であり、多くの治療家が有能な治療家になる目的を達せず中途半端な治療に甘んじている。あるいは中途挫折する人はそれ以上の数に上っている。

治療を学ぶことに関心を持つ人の多くは、ただ治療法を修得したいという希望のみで、治療がなされる条件について無謀としか言えない行動をとっている。確実に修得できない方法をとる人が修得できていない。確実に修得できる方法をこの小冊子は説いている。

患者はどのような性格タイプでも患者として成り立つが、治療家は違う。あらゆるタイプの患者から、患者自身の生命を預けられるだけの信頼感を所有している必要がある。つまり治療法の学習と並行して、自身に有能な治療家像のイメージが抱けない人が治療の学習に挫折する、あるいは名人治療家としての成績を上げられないのである。

何事も一つの技能の修得は、未知のものを学ぶわけである。第一に治療法の正否を確認すること。自身の目と感性で頂点に立つ治療法は何かを徹底して探究すること。中途半端な姿勢では見つけ出せない。次はその治療法の正しい指導者から真摯に学ぶこと。学び、誤りを指摘され、それを修正する。その繰り返しが学習であり確実に向上して行けるものである。しかし、治療界では最初の練習で結果がでないと自分に才能がないと安易に挫折する意志薄弱な者が実に多い。だれも挑戦する前から治療の才能がある人はいない。基本は治療家になりたいという願望ではなく、治療家になるという意志が自身に存在しているかどうかにかかっている。

真の治療理論、治療技術を修得した人を見ると、苦しみながらも患者から見た理想的治療家像に自然と変身している。そのより高度な治療家像を描ける人が名人治療家になっている。治療の学習に果敢に挑戦すると同時に自身の患者から見た治療家像を描くことが重要で、かつ学習時の受け皿となる。全く自身の治療家像がイメージできない学習者に、高度の治療術の指導は不可能である。中途の段階から脱せられない治療家も、自身の治療家像が曖昧であったはずである。

受け皿が完全なら、その余裕が次には治療法の練習を自然体で理解していけることにつながる。

もし、あなたが治療に対する真摯な気持ちであるならば、このガイド書の文章も、あなたが名人、有能な治療家になる宿命、因縁があるからこそ読んでいるのである。

高度治療の学習は指導者から頂くという受け身では身につかない。学ぶとは未知のものを知ることであり、創始者、指導者の知識は彼らの視点、観点により存在するものである。高度治療法を修得するためには先に創始者、指導者と同じ視点、同じ観点に立ち思考することが重要である。修得できない人は自身の視点、観点、我流を頑なに捨てようとしない人である。治療法修得のポイントはこのようにシンプルなのである。

治療法学習の第一歩は見学から

学習する治療法をまず見聞すること。良く見て、確信してから学ぶ。しかし、多くの指導者は見学されることを嫌う。知られること、盗まれることを嫌う指導者もいる。学習者も安易な態度、自己流で修得したい傾向があり、臨床の現実に直面することを嫌い、見学に関心を持たない。指導者、学習者共に臨床の厳しい現実を避けたい傾向が治療界には存在している。律動法は従来の手技治療とは異なる。最高の治療法探求は見学から始まる。

手技療法の展望

従来、手技療法理論の最先端を進むのはカイロプラクティック、オステオパシー医学の一部にあることは常識である。ただ、両医学ともその理論そのものが手技治療を代表するくらい種々な理論分野があり、すべて優秀であるわけではない。そして優れた治療理論も、ごく一部の鋭敏な感性を持つ者には熟知でき、その高度理論を理解できるであろうが、活用治療家がその域まで達していなければその治療法の高度さを理解できないということを知ることが重要である。従ってその治療家の技量の優劣もピンからキリまで存在する。

この両治療学の優れた面は、脳脊髄液循環理論、脳の一次呼吸理論、内臓呼吸理論、上部頸椎メジャー論、種々の脳の生理機能理論など、西洋医学が明かせない多くの生体機能を発見しているところにある。

次に高度治療法選択のヒントを挙げておきたい。それは確実な正しい、正常・異常の判定法が診断学にあるかどうかということ。では律動法は果たして、高度治療効果を上げる高度治療学なのかどうか?

まず、診断学の基本、生体組織に対す正常・異常の判定法であるが、これはA・K（アプライド・キネシオロジー）の筋肉反射テストを導入し、高度に活用していることである。母指・小指対立筋テストも用いるが、容易に習得できる筋肉反射テスト法として開発した TR テストを広く活用している。

従来、その技術の難解さから、DC・グットハートの来日以来、長く国内のカイロプクティックスクールで指導されながら、大勢の治療家に定着することがなく、一部で臨床に活用されているに過ぎなかった。律動法においては微細なモーション・パルペーションを併用してきわめて微細な組織まで、正常・異常の判定をする。伏臥位での腰椎の微細モーション・パルペーションでは、腰椎と同時にすべての大脳まで診断することができる。高精度のＴＲテストの活用から、カイロプラクティック、オステオパシー医学における高度理論を検証し、さらに新たな病因論を次々に発見して、手技療法の頂点を行く医学になっている。

律動法診断学でのもう一つの特徴は、体内組織、内臓、大脳の透視診断である。透視診断とは古代中国の神医とされ2500年以前に存在したという扁鵲の駆使した診断法である。塀の外から室内の病者の体を透視診断したと伝承されている。律動法では、モーション・パルペーション、ＴＲテストを高度に活用しながら、治療感性を向上させ、順次人体透視能力を習得する指導をしている。律動法の指導目標とする治療家像は、人体内を透視して内臓、骨格、脳、動脈・静脈を視る治療家、まさしく古代中国の神医・扁鵲治療を再現させることである。

最近のセミナーでは、律動法の研究科会員15人全員が、患者の前3～5メートルの地点から患者の脊椎、骨盤の診断、腎臓、肺、婦人科器官、脳の左右の異常側の遠隔診断を行い、そのすべてが正解だった。次に同距離からの腰椎5番の律動調整にも成功して、それらの異常ポイントをすべて正常にしている。治療においては診断法が最も重要である。それは診断できた領域、深さまで治療が可能だからである。

西洋医学では救急救命、外科手術以外の多くの疾患では治りにくいか、全く治せない医療が行われているのも、原因診断がなく原因を究明できないからに他ならない。

律動法の診断法の特徴は以下である。

１．生体の脊椎、骨盤、頭蓋骨等全骨格系を呼吸運動に伴う律動現象の視点からとらえる。
２．筋肉反射テストであるＴＲテストによる正常・異常判定法
３．微細モーション・パルペーション診断
４．透視診断

である。

律動法研究会は究極の診断法として、指導目標を扁鵲の行った透視診断の習得においている。筆者は平成の世に扁鵲の透視診断を再現する治療家を50人輩出する目標を掲げ、既に数メートルの距離から大脳、内臓の左右差を正確に診断できる治療家を20人養成した（平成27年10月時点）。筆者自身の遠隔透視治療では、一般者対象の平成27年8月の講演会会場で参加者70人全員を透視診断し、全員の同時集団治療を行っている。ＨＰの動画を閲覧していただきたい。

一部　律動法理論

1. 最高レベルの手技治療を追求して（効果においてカイロプラクティック、オステオパシーを超える律動法の体系化）

創案から今日までの発展経緯

カイロプラクティックの一手技の臨床を展開していたとき、メジャーとなる頸椎１番に対し、さらにその一椎骨自体の各部位のメジャーの診断をしていた。当時、既に筆者は手指先の触覚が空間にまで届く感覚を得ていた。その触覚で患者の体内部位を知る感覚もあった。Ｃ１の横突起、椎弓を診断しているうち、手指で接触不可能なＣ１の前結節部位がメジャーである診断をしたときが最初の透視診断であろう。そのときから手に接触不可能な部分を診断し、アジャストすることが習慣化したのである。当然、治療後マイナーとなる他の異常個所がすべて消失している。これが律動法の診断と治療の原点であり、1985年ごろであった。当時、セミナーで出会う知人たちから何のテクニックを採用しているのかを問われ、手に触れないでアジャストしていると答えても、誰も全く理解外にあり、話は途切れた。

その後、人体最大のメジャーポイントの探索に長期間費やした。頸椎5番にも相当な感触を得て頸椎5番をメジャーとする治療を数年実践していたが、身体組織の障害のすべてをより深部、そり微細組織まで治せるより高度のメジャーポイントの探索はその後さらにめまぐるしく変遷し

た。全身の骨格系、全身の内臓、脳全体、全脊髄の診断から、そのすべてを治せる部位を追求し、それは全身の骨格系にとどまらず、体表部位から、さらに身体周辺の気である、エーテル体、アストラル体と称される身体周囲のエネルギー層にも及んだ。そして頭部の周囲、体幹の体表上 5 センチ、10 センチ、20 センチのエネルギー層のメジャーポイントを日々長期にわたり無数に探求した。それは数百にも及んだ。そして最後にそれらのすべてのメジャーポイントを正常にするゆるぎないメジャーポイントに行き着いたのが腰椎 5 番の律動変位であり、そしてその変位（リスティング）を代表するのが PR・PL である。それは 1989 年ごろであるが今日まであらゆる人体組織、器官の障害を究明してきてもその腰椎 5 番の PR・PL の律動リスティングが最高位の調整ポイントであることは不変であった。微細な脳腫瘍、脊髄膜腫瘍でも、あらゆる組織の異常を解消するメジャーとしての超絶さを今日ますます実感している。

その後、最初のセミナーは平成 7 年の池袋・たにぐち書店セミナーハウスを皮切りに全国各地での公開セミナー、そして基礎シリーズ、初級シリーズと並行して月例セミナーを今日まで継続開催している。

初期のころの名称は「生体波動調整法」としていたが、文字通り腰椎 5 番の波動的動き現象に注目して最大のメジャーポイントとしたからである。しかし、その後、治療界で広く「波動」の名称を使われだしてきたので、混同を避けエンタプライズ社からの出版を機に「生体律動調整法」とも掲げ、再版で「律動法」に名称を改訂した。律動法の理論は数あるカイロプラクティックテクニックと比較しても特異な性格がある。これをカイロプラクティックだと言っても、カイロプラクティック界からは受け入れないだろう。そこでカイロプラクティックとは別の治療法として命名したのである。

カイロプラクティック、オステオパシーとの違いの一つは、「律動法」の創始者、茂木 昭が現在現役で日々臨床を行っているので、この医学は日々発展、進化中である。例を上げると、自身の診断法には透視診断を重視して来たが、平成 20 年代前半に入ってから、その透視診断法をセミナー受講者にも指導できる確信を持つに至り、その形式を古代中国の扁鵲の透視診断・透視治療と同一であることから、古代中国の神医・扁鵲にちなみ、扁鵲治療の再現を明確に指導目標とすることになったのである。

2. 律動法の治療理論

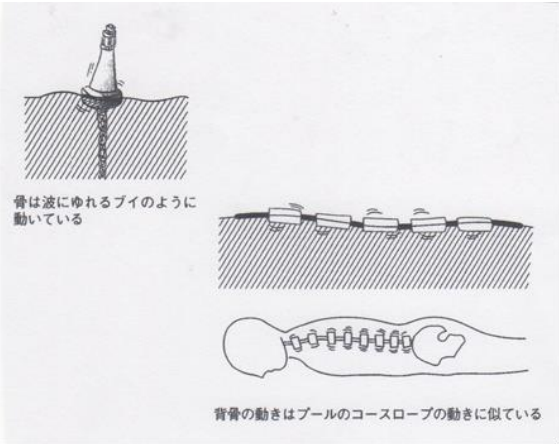
①脊椎全体と骨盤・頭蓋骨の律動現象

生きている人体を頭に浮かべてほしい。それは機械的ロボットとは異なる。まず自身の体の感覚をじっくり感じ取ると静止時でも動脈・静脈の流れにとどまらず、心臓、肺、次は腸まで動きを感じ取れる。では脳はどうか、脊柱はどうか、身体を静かに感じ取ろうとすると蝋人形とは違い、皆、動いている。脳までも、脊柱までも決して工作物のように固まっているのではない。

このように治療家がその対象とする患者の生体も動いているのである。高度治療法は治療理論の鵜呑みでは成り立たない。自身の体の感覚を究めていくことがポイントでる。

律動法の律動法たるゆえんはこの脊椎をはじめ、骨盤、頭蓋骨の静止時における生体の自律的運動現象の発見にある。もちろん、カイロプラクティック、オステオパシーでは頭蓋骨、仙骨等の動きを説明されている。律動法におけるこれらの骨格系の動きの理論もそれらの理論を踏襲し、透視診断を重視した人体内全体を網羅した診断による生体理論と、さらに人体全体にわたる生体の自律運動現象の観察を深めて行くと、生体組織と融和した生体内を流動する「気」の発見にも至った。この気の流れとは古典鍼灸理論の基本である経絡の循環という具体的に説明できない気ではなく、明確にその存在を検証できる気の存在である。

あまりに指導、伝承するべき新しい生体理論、疾患理論が多く、それらの高度の治療理論を指導するために、律動法学習者のより早く律動法基礎の完璧な修得と実力向上を願うのである。

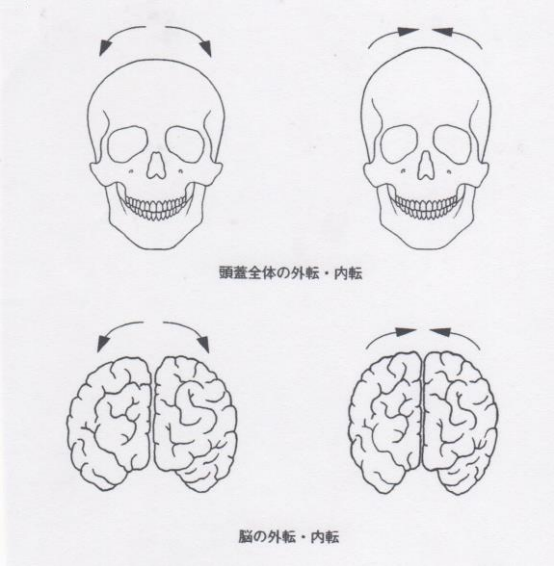


約 2500 年前の古代中国の名医・扁鵲の駆使した透視診断治療が如何なるものであったか、どのような心境で生体を視ていたかの興味も尽きない。

扁鵲以外の他にも外科医・華佗が曹操の脳腫瘍を透視していたが、透視であるから扁鵲は、人体を今日のように解剖学的に内臓系、骨格系、脳・脊髄を見ていたはずで、体内を視られないことから体系化した古典鍼灸理論とは全く違う生体観であったと筆者は確信している。つまり扁鵲も生体を律動法と同様な解剖学的生体観、病因観を持っていただろうと推測している。

○脊椎全体の伸展・屈曲　○脊椎全体の捻転（頸椎・胸椎・腰椎）　○仙骨の伸展・屈曲　○腸骨の左右の伸展・屈曲　　○腸骨左右のＰＩ・ＰＳ　○後頭骨、頭頂骨の伸展・屈曲（脳の屈曲・伸展、拡張・収縮に伴い全頭蓋骨が動いている）さらにはこれら全身の骨格系の動きは前述した人体を上下に流動する「気」の流れと一体になる動きをしている。

以上の全身にわたる骨格系の歪み、変位は腰椎５番の律動変位、Ｌ5 のＰＲ・ＰＬの律動調整によりすべて解消され全身機能が活発に向上する。律動調整後、3 秒で下肢まで温かくなり、汗ばんでくる現象は人体全体に血液循環が活発になった証拠であり、この現象が治療効果の原点である。確実に最高位の疾患、全身組織の回復・向上がなされるのである。



透視診断の指導開始

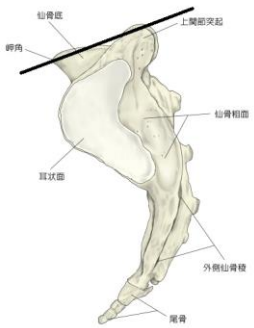
透視診断に関して、近年その診断法がようやく受講者に指導出来得る体制が整った。平成 22～23 年以前に受講された方々にはホームページの動画で再確認されることをお薦めする。

近年の基礎シリーズ、月例セミナー受講者の進歩はめざましく、筆者も驚くほどである。自由に骨格の変位、脊椎、仙骨、腸骨、頭蓋の変位を診察台に座った着衣状態で触診前に知ることができるような治療家を目指してほしい。

②腰椎５番（Ｌ5）の律動現象

腰椎５番の律動現象とは腰椎自体はわずかな動きであるが、腰椎５番を包含するエネルギーは大きく律動しているのである。その律動調整もこのエネルギーとしての腰椎５番の動きを調整するものである。

次に、腰椎５番を乗せている仙骨とその部分、仙骨底をご覧いただきたい。この仙骨とその上面、仙骨ベースである。筆者は人体バランス、人体機能を無限にまで生かし切っているこの神がかり的仙骨の完璧な



構造とその角度、その構造の凄さに、ここに神が宿っているかのような予感がするのである。この骨の動的重心制御が、人体全組織の骨格系、内臓系、脳、そして精神までも包括した管制塔になっているのだろう。人体全組織がこの骨のなかに投影されているように思えるのである。

そして、この絶妙な仙骨岬を結ぶ仙骨ベース線の角度を土台として腰椎５番がある。腰椎５番の重要性は腰仙関節として構築学上からも推測できるだろうが、頭蓋骨、脳、脊椎全体を乗せている仙骨上面の約横５センチ縦３センチの仙骨底の台上にあり、上半身と頭部全体を支えるバランスに対するベアリングの役目をしている。腰椎５番の椎体中に鋭利な重心点が存在し、人体全体の骨格系、内臓系、重量の神業ともいうべき微調整をしている。腰椎５番と仙骨底間の重心点のわずか１〜２ミリ単位のずれの固着が人体全体には大きな障害を起こすのである。反対に１〜２ミリの傾きの律動調整が人体全体組織の障害を高度に画期的な回復、機能向上させるのである。また上半身と下半身の捻転、前後、左右側屈運動の要ともなり、内臓、脳を含めた常時正常な全身バランス保持ための峻厳な微調整作業を行っている。椎間板ヘルニア現象もこのようなホメオスターシス現象として見なければならない。生体におけるＬ５ の律動現象は縦方向、水平方向、斜め方向、上下方向、前後方向とすべてが複合された動きを行っている。波止場に浮かぶブイの動きを想い出してほしい。生体である以上Ｌ５ の動きには各方向性を持った無数の動きがある。それらを統合する変位がＬ５ のＰＲ・ＰＬの律動リスティングであり、そのＰＲ・ＰＬの律動調整が最大の人体機能調整ポイントとなるのである。Ｌ５ の律動的動きにはすべての生体機能を統合し調整する生命力が存在する。

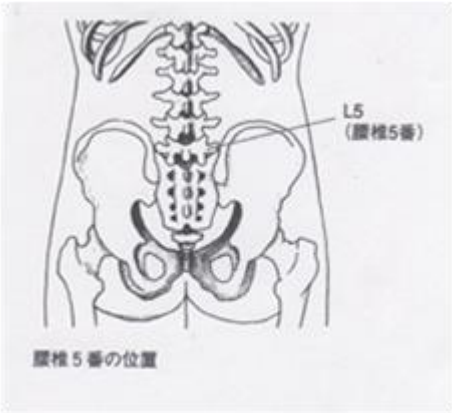
③内臓呼吸、脳呼吸と律動現象

内臓、脳は肺による横隔膜呼吸以外にも第１次呼吸として脳の呼吸運動があることはＳ・Ｏ・Ｔ（仙骨・後頭骨テクニック）で知られている。これは肺・気管支機能が正常でも脳の呼吸運動が障害すると、肺呼吸ができなくなることでもその存在が分かる。

反対に肺呼吸を停止すると、脳の動きも内臓の動きも心臓以外ほとんど停止する。

肺も上下の動きだけでなく、水平方向の内旋・外旋がある。腎臓も内旋・外旋に動いている。肝臓、大腸、小腸も内旋・外旋の動きが大きく、小腸では右回旋、左回旋の動きも多い。膀胱も内旋・外旋、子宮卵巣は内旋・外旋、その他の複雑な動きがある。それらの内臓の動きは心臓、肺・気管支以外、機能低下時に確実に停止に近い状態になっている。胃腸の働きが悪いとき実際に動きがきわめて微細になっていることから、自身でも腹部の硬化感、苦満感、膨満感など胃腸が動いていないことを自覚できるはずである。治療後は確実に大きな柔軟性に富んだ円滑な動きに変化して、深い呼吸とともに全身の寛ぎ感、温かさが得られる。

脳についても異常時、病的状態時には内臓以上の大きな動きの差が生じている。特に雨天、暴風などの強い低気圧が続く気象時には、脳、腎臓系の膨張、浮腫が生じる。それにより全身の浮腫、脳の浮腫、血流障害が生じ、全身機能の低下を来たす。頭痛、ふらつき、耳鳴り、不眠、うつ、パニック症状、心臓障害、胃腸障害等種々の愁訴を訴える患者が集中する。心筋梗塞、脳梗塞の発作も起きる。このとき、脳脊髄液（ＣＳＦ）循環に確実な障害が起きている。端的には種々の神経症等精神疾患患者の脳は固まった状態で脳呼吸がきわめて障害されている。膨張が強いとイライラが生じ、落ち着けない。心の落ち込み時は、実際に下垂体、脳底部が下垂しているのである。治療後、あるいは診断時点で下垂体の変位を是正すると一瞬にして表情が明るくなり、笑顔がこぼれる。下垂体が下垂していることから、トルコ鞍の上下の動きが低下して、下垂体の上下運動の障害から下垂体ホルモンの分泌障害を来たす。下垂体の膨張、萎縮、捻転の異常から、同時に婦人科障害が生じる。下垂体の操作から子宮・卵巣は一瞬にして炎症、硬



腰椎５番の位置

化、膨隆が改善する。強い低気圧気象では腎臓、胃腸は円滑な大きな動きも停止している。
　軽い食あたり時にも細菌の脳への波及から、脳の動きの障害が顕著であり、頭痛、微熱が発生する。これらの内臓・脳が動き出す治療がされなければならない。そのためにもこれら内臓・脳の動きの障害を診断できることが高度治療において欠かせないのである。

④腰椎５番の律動調整と全身骨格系、内臓系、脳の調整
　Ｌ5 の律動変位の調整は人体全組織のあらゆる変調、異常を解消することができるが、**入門者と熟練者のＬ5 の律動調整の精度は全く違う。その目的に対して 10%と 90%の違いがある。つまり方向性は完全に調整できたとしても、表層の調整、深層の調整、身体組織を完全に網羅した調整、身体全体を完全に捕捉できない調整というように Ｌ5 の律動変位を知覚する深さ、広さに技量の差が出る。**
　人体の内部組織を感じられない初心者の触診では、それまで自然に脊椎が動いていたものが、患者の生体は拒否反応を起こして動きを止めてしまう現象がある。初心者で動きが分からないと言うのも、このとき実際に動いていないのである。治療家として大成する人と、分からないと言って断念、挫折する人の違いはここにもある。
　しかし、最初からあきらめる必要はない。驕りをもった治療家、あるいは心を込めて治療するなどの一人よがりの治療家でなければ、虚心による淡々とした心境での調整なら入門段階から、他の治療法にはない優れた治療効果が表れるはずだ。それほどＬ5 の律動調整のレベルは高い。次第に身体全体を正確に診断する技量を積めばよい。研究会では求める者には、徹底指導する。

3. 治療法のすべては診断法にかかる
　筋肉反射テストは高度治療を可能にする。
　律動法の特徴に筋肉反射テストの完璧で超微細な、かつ縦横無尽な活用がある。さらにＡ・Ｋがきわめて優れた診断法でありながら治療界でじゅうぶん普及されず、Ｏ リングなどの亜流テストを生んだ原因にその技術の難解さがあったが、その筋肉反射テスト修得の難解さを解消した方法に、律動法が開発した筋肉反射テスト法であるＴＲテストがある。
　これにより確実な正常・異常の判定法を治療家万人のものとすることができた。後はすべての治療家がこのＴＲテストを活用して、人体、疾患障害の状態、原因を究明して西洋医学の限界とする多くの疾患、障害を治し、人々を病魔から救うことである。

4. 診断できた地点まで調整できる
　治療行為は、何より診断に基づくことは言を待たない。しかし、現実には原因診断無き治療が横行している。例えば、国家の主流医学である西洋医学を見れば分かる。外傷、打撲以外多くの疾患が原因不明である。感染症では 2009 年の当初死亡率が高いと警告された新型インフルエンザ騒動がある。特効薬タミフルの不足から起きた輸入騒ぎが数か月後には過剰になりだし、この新型インフルエンザ騒動は終焉したのであるが、西洋医学的問題点の一部の露呈である。
　原因を究明せず、対症療法だけの薬物、切除が多過ぎる。あらゆる難病診断も本当に難病なのかどうか鵜呑みにできない。肩こり、腰痛、鼻炎、皆、原因不明である。椎間板ヘルニアも椎間板は脊髄を守るための組織で、決してヘルニアを起こすために存在するものではない。全身の構築学的バランス調整をしているに過ぎない。他にも鍼灸がある。古典鍼灸理論には、骨格診断、脳診断いずれの診断法もないのである。熟練手技治療家ならば、鍼灸界に目を転じて、日本鍼灸界、中医学鍼灸界が骨格診断、脳診断不在のまま、人体全体を治療対象とする医療であることにただ嘆息するであろう。それでは古典鍼灸理論は、人体の何を診断して、何を治しているのか？とても理解の及ばない世界である。
　30 年ほど前、来院していた患者が整形外科で、医師に「背骨を治さなくては治らないよ」と毒づいたと語っていた。医師、治療家でなくても骨格診断の重要性は誰でも知っている。

すべてにおいてあらゆる組織の診断ができなくては高度の治療にはならず、治療効果の確率は低い。改めて言うが、治療というものは診断できた領域まで治療効果を上げることができる。自身の手技的感覚で脊椎を診断できる治療家は脊椎まで、脳を診断できる治療家は脳まで、脳腫瘍まで診断できる治療家は脳腫瘍まで、精神疾患まで脳内で診断できる治療家は精神疾患まで治せるのである。受け手の患者の生体も治療家が理解したところまで、治癒力は急激に回復力を発揮する。治療家の診断力と生体の回復能力の深い関係も後日、解説したいと思っている。

5. 現在存在する唯一最高の正常・異常判定法は筋肉反射テストである

確実にすべての治療家が修得できるＴＲテスト

これまで診断法の重要性を説明してきた。その筋肉反射テストと律動法においてその代表であるＴＲテストについて説明する。

以下の写真により数多く練習してほしい。あなたが名人治療家になるか、ならないかがここにかかっている。練習を通して手指の限りなく繊細な感覚を活用することで、的確な精度の高いテスト法を習得し、同時にそれは治療家としての診断能力を向上させるための自身の脳機能を調整させることになる。このテストの習得は難しくない。一般の農婦患者の診療時に TR テストの質問に答え 1～2 分、指導しただけで確実に習得しているのであるが、治療家は自己防衛的先入観の強い人が多い。端から難しいものと勝手に決めつけ、分かろうとしない者が少なくない。難しいだろうと予測した時点で、術者の手指の神経系は脳の運動野が緻密な機能を失っている。その脳での予測から手指の機能は低下して、粗雑な感覚しか伝えられなくなっている。この理論がＴＲテストに限らず、筋肉反射テストが難しい、分からないという治療家の独り相撲なのである。

そして西洋医学、東洋医学が多くの疾患に無力であるように、人体機能の世界は未知の広大な領域である。その人体機能を深く探索するためには、より精度の高い診断法が必要である。その高度診断に最適なものがＴＲテストの体得である。その修得のコツは容易で、後は限りなく微細な感覚を日々向上させ、より精度の高いＴＲテストを目指すことである。

筋肉反射テスト・ＴＲテスト

写真Ａ

写真Ｂ

手順 1.自己の母指・示指骨間筋を片方の示指を固定して母指でごく微細に軽く挟むようにして、母指を軽く沈める。平常時の微細な弾力を確認する。その弾力をロックしていると言い、正常時の基準とする。計量器でいえば 0 点である。写真Ａ

手順 2.自己の一方の手で診断対象部位に軽く接触する。写真Ｂ

手順 3.次に自己の手の母指・示指骨間筋を再度ごく軽く沈める。写真Ａ

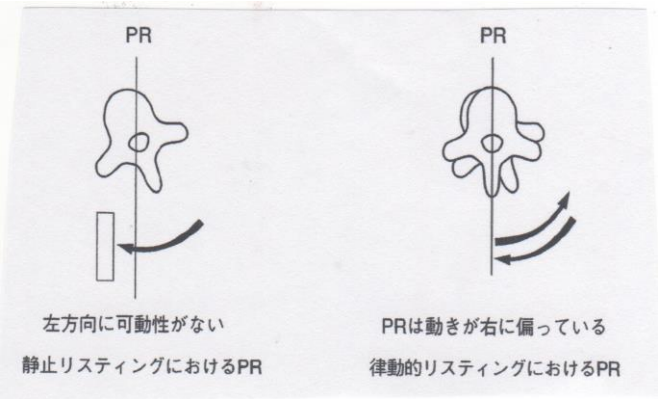
手順 4.診断個所が正常なら、骨間筋の弾力は不変で沈まない。しかし、異常なら正常な弾力を失い沈んでいく。ロックが壊れると言う。写真Ａ

※なぜ自己の手の筋力の変化で判定できるのか？　生体に触れた後Ａ・Ｋ理論からも 20 秒はその反応が手に継続するからである。

①骨格系の診断法

脊椎、仙骨、腸骨、後頭骨等骨格の障害部位の診断

ＴＲテストの写真のように、脊椎の頸椎・胸椎・腰椎を一方の手指をセンサーとして接触した後、その手で他方の手の骨間筋を軽く沈める。次々異常部位を特定する。同様に、仙骨、腸骨、後頭骨その他の頭蓋骨を診断する。異常があれば骨間筋は沈み込み、ロックが壊れる。



②内臓系の診断法と基本診断点

ＴＲテストの写真を参照に、左右の肺、上葉、中葉、下葉。心臓は初歩では１点でよいが、熟練してきたら、便宜上１点から４点まで設定して、左右心房、左右心室と仮定して診断する。更に透視ができるようになれば体内の正確な各部位を診断する。

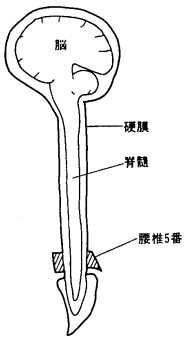
次は、肝臓、胃、小腸、大腸の順である。次は婦人なら子宮、左右の卵巣。背面に回り左右腎臓、左右腰部、左右梨状筋・坐骨神経。後は、四肢の関節、筋肉に症状に関係するポイントを診断する。

③ＴＲテストによるメジャー・マイナーの検出法

仮に脊椎を例にする。Ｔ１とＬ２の異常が判定されたとき、

1.Ｔ１に触れる（ＴＬという）と異常がでる。Ｌ２にＴＬしても異常がでる。このとき最初にＴ１にＴＬして異常を判定した後、続けてそのままＬ２にＴＬすると
最初の異常反応が変化して強くなったとき⇒Ｌ２がＴ１の異常を消すのだからその原因、メジャーとなる。もし、低下反応した骨間筋が変化しなければＬ２はメジャーではない。

2.同様に、Ｌ２からＴＬしてＴＲテストに異常がでて、そのままＴ１にＴＬしてその異常が解消したなら⇒Ｔ１の方が強い異常ということでＴ１がメジャーである。もし、低下したＴＲテストがそのまま変化しなければＴ１はメジャーではない。



図II-18　L5と脳脊髄。腰椎５番の調整は脳、脳硬膜のすべてを動かせる。
「生体律動調整法」エンタプライズより

6.　ＴＲテストによる高度診断法（前の写真の説明も見ながら）

①病理診断と悪性腫瘍の診断

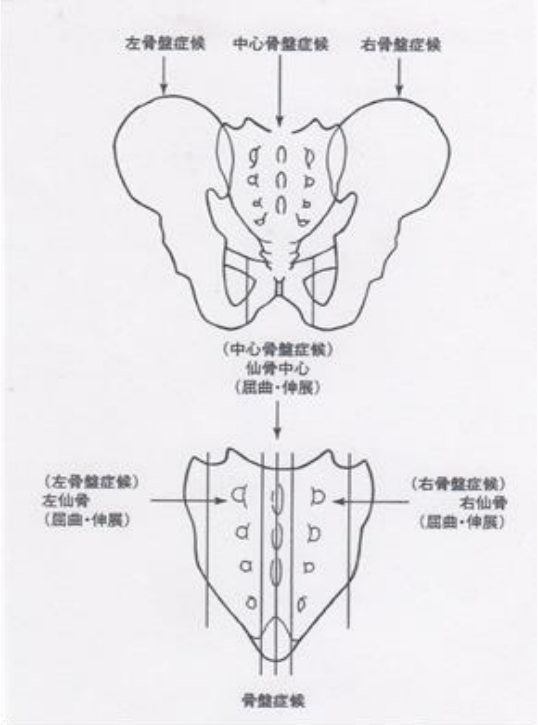
○一方の手指を触れて診断するのと同様に手順 2.で触れた部位が異常のとき、骨間筋は弾力が消失し、沈む。写真Ａ　続けて病理組織プレパラートに触れてから、手順 3.の骨間筋を沈める。写真 Ａ そのとき、骨間筋が元の弾力に反応して、沈まなくなったら、そのプレパラートの組織が反応したのであるから、その触れた部位の組織はプレパラートと同種の病的状態にある。脳梗塞組織のプレパラートであれば脳梗塞と診断できる。反応せずに骨間筋が沈んだままならその病理的異常ではないことになる。

○その異常部位が良性か悪性か？

病理プレパラーと同様の方法で癌細胞プレパラートを使い同様の反応を見る。悪性なら反応し良性なら反応しない。

②感染症診断と感染源診断

病理診断と同様の方法で、感染ウイルス、細菌プレパラートが反応するか否かを見る。次にそ



の異常個所に感染症が判明した後、その感染症の異常反応部位のすべてが消失する部位が検出されればそこが感染源である。ワクチンからの感染であれば、ワクチン接種部位、上腕や肘窩部などを特定することができる。食中毒からの頭痛なら腸で反応する。

③微細骨折診断

高度治療診断において最も基本となる２大原因は、感染症と微細骨折診断である。症状のある脊椎、四肢部位に微細骨折の存在しないところはほとんどないと言える。内臓であっても、呼吸器疾患は上部胸椎、心臓なら中部胸椎の微細骨折、圧迫骨折が存在する。関節においても靭帯損傷はすべてその土台に骨の損傷があり、その元となっている。骨格に損傷がない靭帯、筋肉の障害はない。この微細骨折（マイクロフラクチャ―）診断は微細骨折可動性テストによるが実技実習の場でしか解説できず、文章ではその感覚を伝えられない。

セミナーがその実技向上の訓練場である。

7.　体内透視診断活用のＴＲテストによる高度診断法

この体内の透視能力が向上してきたならその体内組織すべての診断ができる。手指によるＴＬの代わりに透視した部位を負荷、ＴＬとしてＴＲテストをすればよいのである。透視した組織に異常があればそのまま負荷となり、ＴＲテストに異常判定が出るからである。

脳内、下垂体、全脳動脈、脳幹、延髄。あるいは脊椎の椎体、脊柱管、骨髄。脊髄の左右灰白質、白質。眼球なら、角膜、水晶体、硝子体、網膜、膝状体。下垂体に腫瘍があればその下垂体腫瘍プレパラートに反応する。

精神的ストレスに対してもそのストレス元とそのストレスと認識されている脳組織を特定することができる。精神的ストレスを筋肉反射テストで診断する方法はＡ・Ｋでも解説している。受験学生の不得意科目の特定から精神疾患の原因を脳組織に検出し画期的治療効果をあげられる。

8. 腰椎５番の律動調整法、律動変位ＰＲ・ＰＬ

Ｌ5 の律動変位に対する律動調整はあらゆる身体組織の異常を解消、あるいは改善することができる。なぜなら透視が可能になると、Ｌ5 の事前の軽い検査操作によりすべての組織の異常が解消されることを検証できるからである。

二部　律動法の診断から治療までの手順

1.　Ｌ5 の律動リスティングと調整法

Ｌ5 の律動変位とは前ページに示すように静止リスティングと方向性は変わらない。静止リスティングと同方向の動きをとらえることがである。

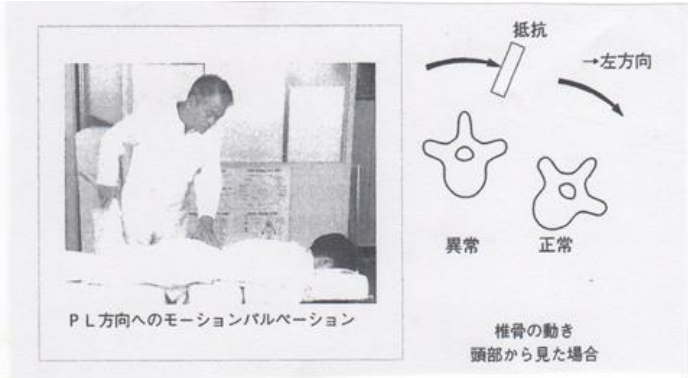
アジャストにおいては薄い衣服上から静かに手掌の中心をＬ5 部位に軽く触れるくらいに乗せて、生体の呼吸に合わせる。直ぐにその存在に意識を向けると容易にその律動現象を感知することができる。それから患者の２呼吸ほどで手を放す。２呼吸ほどで完全にＬ5 の律動が正常化した

円滑で大きな動きに代わることを感じて手を放す。入門者では５呼吸以上になるとＬ5 の動きは停止することが多い。そのときの患者の生体は術者のエネルギーに拒否反応しているからである。

2.　診断から治療までの手順

①まず自己のＴＲテストのロックを確認しておく。もしロックが効かないときには自己の姿勢を整える。自身の呼吸も浅くなっている。またはスイッチングの調整、チューニングをしておく。

　チューニングとは自己の効き手の手掌を自己の胸部正中に向け母指と四指を正中線から左右に2～3㎝離して軽く擦過するのである。その後、再度ＴＲテストをしてロックが効いていれば診断に入れる。２回くらいでよい。



②患者の背部から脊椎の代表点６点ほどＴＬする、頭部を縦に３線擦過する。そしてＴＲテストする。
③左右の耳、左右の目、鼻、気管、左右の気管支、心臓、肝臓、脾臓、胃、小腸、大腸、女性は子宮、卵巣、背部の腎臓、腰部左右。
②と③は基本診断点である。
④愁訴及び障害部位をＴＬする。
⑤骨盤症候診断
　ＴＲテストにより　１中心骨盤症候　２右骨盤症候　３左骨盤症候　以上の２種の複合である ４ 右骨盤と中心骨盤症候　５左骨盤と中心骨盤症候　６両骨盤症候の６種がある。
　各領域の生体エネルギー（気）の流動が障害されているのである。

腰椎５番の律動調整

　検出法
右腸骨のＴＲテスト異常⇒右骨盤症候⇒右仙骨。　左腸骨のＴＲテスト異常⇒左骨盤症候⇒左仙骨。　仙骨稜のＴＲテスト異常⇒中心骨盤症候
⑥　②～④までの異常個所のモーション・パルペーションで異常を確認しておく。
⑦骨盤症候から⇒Ｌ5 のリスティングに各仙骨の屈曲・伸展の変位がＬ5 のＰＲ・ＰＬのいずれかで解消することを確認して（検査操作）、
⑧Ｌ5 のＰＲ・ＰＬの律動調整をする。
　（これが唯一の調整行為である）
⑨治療後チェック個所がすべて解消することを確認する。
⑩モーション・パルペーションでも解消されているか確認する
⑪もし解消していなければＬ5 の変位が調整されていないはずである。再度ＰＲ・ＰＬの診断をして再度調整をする。

3.　律動法の臨床現場から

□筆者の河南中医薬大学付属病院での臨床公開

　1993 年河南中医薬大学病院にて、求めに応じ遠隔透視治療を披露する。腰髄腫瘍手術後の後遺症から、強度の腰痛、坐骨神経痛で入院中の患者を治療した。中医師二人を伴って病棟の外 50 メートルの地から、遠隔診断に次ぐ遠隔治療をした。治療後、病室に戻り確認する。下肢の筋力が

回復し、先に同患者を治療した医師より強くなる。周囲が驚き大部屋の患者、医師が集まってきた。当時筆者は扁鵲が行ったという透視診断・透視治療については知らなかった。

□正しい手技療法は多種疾患に効果を上げられていない西洋医学を超えなければならない

西洋医学を超えているかどうかを動物の治療から見てみよう！

犬猫のペットは現在、平均一日数匹の治療を行っているが、極力制限している。通院患者以外のペットは断わり、治療後も他には紹介しないように伝えているが、噂を聞き問い合わせがくる。いきなり、一度に 5 匹の犬を車に乗せ来院した人もいた。無条件で受け入れていれば、その評判を聞き、数年後には犬猫のほうが多くなり、人間の治療ができなくなることが目に見えている。動物病院からのいやみも時に患者から聞いている。

そのペットの疾患も骨折から、各種内臓疾患、内臓の悪性腫瘍、骨折、関節炎、難聴、眼科疾患等々全疾患に及ぶ。継続する血便、下痢が翌日には止まった等の例も数多い。手術を宣告されていた膝関節炎が治り、階段を走って上がる。２階より転落し複雑骨折して四肢にギプスをしてきた子犬が、初診治療後ギプスをしたまま跳ね回る等、いずれの疾患においても飼い主が驚きの声を発する効果を上げている。通院患者からのペットの依頼にも、承諾の言動以外、その疾患、病状について事前には一切聞いたことはないが、今日までに一度も飼い主が効果に驚かなかった疾患はなかった。

多くの臨床を通じ、風邪、食中毒等の感染症をはじめ内臓疾患、運動器疾患等、犬猫の疾患は人間の疾患、病気とほとんど変わらないことが分かる。呼吸器の結核菌等の感染症も人間と同じで、悪性腫瘍も多い。視覚から判断できる治療効果も人間より顕著で飼い主が驚く。必ず毎回、血流が良くなり全身が温まり、内臓腹部も締り、張りが出てくる。毛根が締り、毛つやがよくなる。血流が良くなるので、体毛の色が濃くなる。これらの反応と、瞬間にして元気になる様子を飼い主が理解する。初診時には病弱で散歩をしたがらない老犬が数回の治療後は、若々しくなり、散歩を何より喜ぶ。種々な疾患でその変化に飼い主は感嘆している

ここで注目して頂きたいのは、動物医院の治療は西洋医学であるということである。多疾患にわたるその治療で、動物病院より圧倒的に効果を上げているということは何を意味するのか？

そのことからも律動法・新鍼灸法が人間に関しても、同じ西洋医学より多分野で高度の効果を上げていることが証明されていると言ってもよいだろう。

飛行機を利用する遠方からの患者でも一人の治療時間は初診でなければ５～６分で、調整は腰椎 5 番の律動調整のみである。ただその診療のため一日がかり、二日がかりで来るのである。慢性疾患なら、数か月に一回、半年に一回、一日で帰る患者もいれば、数日滞在して受診する患者もいる。診断から調整、チェックまですべて一人で行う筆者一人の一日の患者数は 100 人を超すこともあるがすべて自由診療である。最高時は 120 人であった。

扁鵲の透視治療の再現を掲げている透視診断については、脳腫瘍の診断、下垂体の診断、動脈・静脈の循環について前述した。扁鵲のように塀の外からの病人の診断も完璧に行う。更に遠隔治療についてはあまり触れずに来たが、平成 7 年の律動法公開セミナー以降、毎回ビルの外から室内の受講参加者への遠隔治療を披露してきた。20 年以上にわたりロシア、デンマーク、イギリス、アメリカ、東南アジア、中国、ブラジル、オーストラリア、メキシコ等世界中に及び、多くの人命も助けてきた。ロサンゼルス空港に到着時、心臓の疾患の症状を訴えてきた患者はその後、帰国まで快適に旅行したと言う。ブラジル、サンパウロの医師は、飛行機事故後の後遺症で片足が前に向かず杖での歩行をしていたが、３回の治療後、前に向き、杖なしで歩行できるようになる。インドネシアに出張していた人がベッドから落ち足を骨折し、依頼があった。その遠隔治療後は、そのまま現地で治療せず帰国できたと言う。水難事故、交通事故での意識不明者が直後、意識回復するなど、枚挙にいとまがない。だが遠隔治療については、通院患者の治療ができなくなるので、現在は一切断っている。

□人体を知るためには、大勢の患者を見る必要がある
生体現象を知るには、前述した様に自由診療の患者を一日 20 人以上診て、治すことが最低必要であり、それが入門である。30 人を超してようやく治る治療が分かりかけ治療に自信がついてくる。そして 40 人を目指すことである。真の人体機能とその問題点が見えてくると前述した。50 人を超すと更に、未知の人体世界が拓けて来るのである。

4. 律動法が発見する人体論・病因論は進化中である

人体、生命の多くが未知の領域であるように西洋医学に携わる医師、他の各種治療に携わる治療家、鍼灸師の知悉している人体論、病因論はまだその一部に過ぎない。既存の人体知識、病因知識では不充分なことは、今日の医療が多くの疾患・障害を治せていない現実を俯瞰すれば容易に知ることができる。自動車整備士が、車を修理するようには治療家は人体を知らず、治せていないのであり、多くの疾患に対処できて、多くの疾患、障害をより高い確率で治すために、律動法が発見した新しい人体論・病因論、そして日々進化している理論を多くの治療家に提供している。そのための基本となる律動法学習者の基礎の確実な修得を望むものである。この律動法ガイド書では、そのさわりしか取り上げられないがその重要性を想像してほしい。

①今日の患者が罹患している障害の大部分に感染症がかかわっている。
歯科、耳鼻科、眼科等通院後、四肢の関節、四肢筋肉が強い痛みを訴える患者が多発している。これらの全身、あるいは半身にわたる疼痛が、歯科治療、眼科治療時の疼痛を発する性質の細菌、ウイルスの感染から生じることが非常に多い。痛みの病原体はヒトロ腔内連鎖球菌が多い。
ワクチンの接種による障害も実に多く、近年の子宮頸がんワクチン、幼少時のポリオワクチン、ＢＣＧの連続接種、その他、種々のワクチンによる感染源が左右いずれかの上肢の接種部位であることを特定することができる。
注射時、あるいは血液検査での採血時にもその刺針部位からの感染が少なくない。Ｂ型肝炎なども病院で発見するほど少なくはない。それは病院検査では血液のみを診断対象としているからで、人体組織全体には診断できない。このことが分かると、定期健診、人間ドック等の医療体制でさえ危険が多いことになる。

②人体論について
脊椎の整列理論
ＡＫ（アプライド・キネシオロジー）では脊椎変位について同期変位論を言う。頸椎１番と腰椎５番、頚椎２番と腰椎４番、頚椎３番と腰椎３番…、というように左右同方向に変位するとするロベット・ブラザー論がある。律動法では、全椎骨が拮抗作用で頸椎１番がＰＲなら頸椎２番はＰＬ、頚椎３番がＰＲ。腰椎４番がＰＲなら腰椎５番はＰＬという交互脊椎変位論を主張する。
生命機能上のポイント
生体機能上最も重視しているのは血液循環である。そのことから、循環系の大きなサイクルポイントである心臓・肺、脳、腎臓の３部位の機能診断を重視するべきである。

③病因論について
感染症と微細骨折の重視
打撲外傷がなければ、先天性の疾患を含め、幼少時からの常在性の感染症、成長後の後天性の感染症を重視する。微細骨折については、画像診断で読影不能な骨折の問題があり、すべての人、患者の骨格系に多く存在している。診断は手技による、微細骨折診断法を行わなければ判明できない。5～6 人の整形外科医にも指導してきたが、患者さえそのテスト状態を知覚している。
□人体の疾患は出産時からの影響が基礎にある
現在の疾患、疾病の体質は幼児期からの成長過程の疾病、外傷を調べなくては患者の正確な診

断にはならない。出産時の胎内感染、分娩時の感染、乳幼児、少年期の病気、外傷が成人の体質の基礎となり、幼児期の頭部の打撲は、頭蓋骨の微細骨折として残存し、打撲部分の脳血行障害となって一生の健康度を左右する。更には中年時の血管障害の基ともなっている。成人の各人特有の病的体質、内向的性格、精神障害の原因までも、転落等による頭部の打撲、背骨の打撲から判明することが非常に多く、近年は更に幼少時の交通事故が素因になることが非常に多い。

種々な疾患に対する病因論

西洋医学における種々疾患の治療を概観すれば多疾患効果を上げていない現実と、原因を解明しようとしない医学上の欠陥に行き着く。今後多くの正しい病因論の発見が必要であることが容易に想像できるはずである。

以上の新しい人体論・病因論をまとめて紹介する時間がない。セミナーで逐次紹介解説している。動画でも配信している。

□律動法と新鍼灸法

律動法と新鍼灸法（半身症候鍼灸法）の、人体論・病因論は同一である。つまり、同一の人体治療論を持つ治療であるが、その治療手段の相違に過ぎない。律動法は手技治療家が理解しやすい治療理論で骨格系を中心に説いた理論であり、新鍼灸法は鍼灸師が理解しやすく骨格系理論を縮小し、鍼を使用する治療理論である。

下の写真は、昔日の毎回の公開セミナー時、恒例の遠隔治療の実演披露。

治療前と治療後精細なチェックにより確実な治療効果を検証する。

左、横浜開港記念館のセミナー。
外から建物内の受講生へ遠隔治療、
平成７年

右、新大阪セミナー会場、外からビル内
の受講生へ遠隔治療　平成８年

新大阪でのセミナー風景
写真左、は平成８年

参考書籍・ＤＶＤ

律動法の基本を精細に基本から臨床例に至るまで手に取るように分かりやすく映像で初めて解説した、 画期的手技治療のDVD。
出版社：たにぐち書店
10,500 円（税込）

運動器疾患、内臓疾患、精神疾患まで、全40 症例を収録。律動法の臨床現場をすべて公開、全３巻、３枚組セット　ＤＶＤ
出版社:たにぐち書店
21,600（税込）

律動法と半身症候鍼灸法のテキスト。セミナー参加者必需！

高度治療法の基本理念、奥義、そし治療における多くの常識の間違いを正した。臨床上の具体的診断法、治療法を詳細に記述。治療家のバイブルである。書籍

出版社：知道出版
2,160 円（税込）

初めて、筋肉反射テスト及びＴＲテストを詳細に公開！
筋肉反射テスト書籍版とセットで学ぶことを勧めます。
基本テクニック（律動法方式）を詳しく解説。最高の診断法は筋肉反射テストである。
出版社：たにぐち書店
ＤＶＤ　5,400 円（税込）

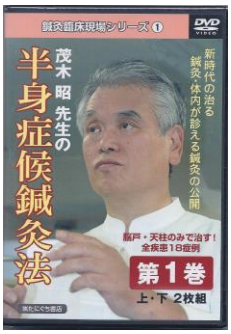
手技治療のための筋肉反射テスト
本書では従来の筋肉反射テストを理解しやすく、さらに誰でも習得できるTRテスト（手母指筋の筋肉反射テスト）の徹底指導をも記載。書籍
出版社：たにぐち書店
1,940 円（税込）

律動法
エンタプライズ刊
13,650 円

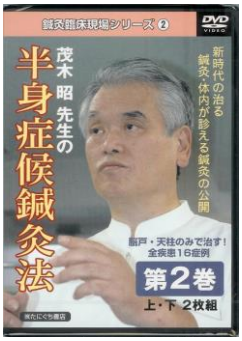
現在再版改訂版
編集中
近日刊行予定

一般読者にも理解出来るように頭蓋骨調整法から、治療一般知識、治療家としての必需知識。
健康知識まで内容満載。書籍
中央通信刊
1,080 円（税込）

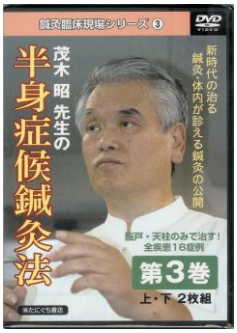
的確な診断学無き、鍼灸界待望の画期的診断法「鍼灸のための筋肉反テスト」
鍼灸界初の正確な異常・正常判定法！
検査部位への接触で正常・異常を。感染症、悪性・良性鑑別まで正確な診断と確実な選穴まで検出できる。テスト法と臨床での活用法も収録。ＤＶＤ
たにぐち書店　4,860 円(税込)



「鍼灸現場シリーズ」
天柱・脳戸周辺の反応点のみですべてを治す、半身症候鍼灸法の特徴と要点。悪性腫瘍、各種感染症、椎間板ヘルニア、楽器演奏の治療、犬・猫の治療、遠隔治療他、18 症例。半身症候鍼灸法の実践を紹介。上下 2 枚組 DVD　たにぐち書店刊
10,800 円（税込）



「鍼灸臨床現場シリーズ」第２巻
16 症例の紹介上下２枚組ＤＶＤ
たにぐち書店
10,800 円(税込)



「鍼灸臨床現場シリーズ」第３巻
16 症例の紹介上下２枚組ＤＶＤ
たにぐち書店
10,800 円(税込)

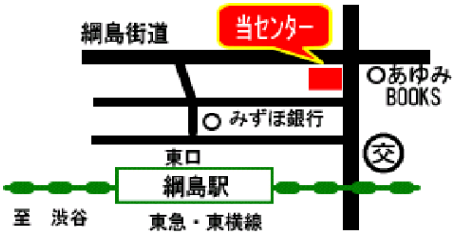
セミナー会場

律動法研究会（周気堂治療室）

東海道新幹線・新横浜で横浜線に乗り換え、1つ目菊名から2駅目です。
東横線綱島駅は特急・通勤特急のみ停車しません。急行は止まります。
東急東横線綱島駅北口バスのり場、③か④番から 5 つ目、高田住宅前下車 2 分

信身治療センター

東横線綱島駅下車東口より徒歩2分あゆみ BOOKS の前のビル2F



一般社団法人・律動法協会
律動法研究会　半身症候鍼灸研究会　（周気堂治療室内）
〒223-0065　横浜市港北区高田東 1-24-1　TEL045-531-2716　FAX045-531-2729
www.ritsudou.com　www.hanshoshin.com　e-mail　info@ritsudou.com

信身治療センター（臨床研修センター）
〒223-0052　横浜市港北区綱島東 1-6-15　吉原ビル 2F　TEL・FAX045(546)1179